

「グローバルな美術館として」

当館はこれまで、岩手県出身の作家を中心とした作品の収集・展示や、多くの方々を魅了した企画展を開催してまいりました。主なコレクション作品は、近現代の岩手に関わる作家を中心に、萬鐵五郎、松本竣介、舟越保武、堀江尚志などがあり、加えて現在活躍中のアーティストの絵画、彫刻、工芸、インスタレーションの常設展を展開しています。1年を通して6企画程度（維持するのが大変困難なのですが）の国内外の作品による企画展を開催しております。これらの展覧会は多くの県民が優れた芸術作品に触れる体験であり、美術館としての役割の中心であると考えています。

全国美術館の状況から

地方美術館は予算の縮小が続き非常に苦しい時期にあると実感しております。一般的には二極化、いわゆる大きな美術館が開催するブロックバスター的な大規模展覧会や人口の多い都市の美術館が新聞社等と連携し大々的な宣伝を繰り広げる展覧会と、それ以外のマイナーで、地味で独自の美術館活動を行うものとで差別化されていますが、まさに当館は後者の典型であり、問題点もそのレベルで生じています。この数年観覧者の数が減り、加えて予算の減額は企画展等の縮小へ直結し、負のスパイラル感が否めず直ぐにでもV字回復的活動が求められています。

グローバルとかグローバルが注目されている昨今ですが、まさにグローバルに意味を見いだし、自信を持って展開しグローバルに繋がる、このこと以外に地方美術館の生き甲斐は無いものと信じています。「山椒は小粒でびりりと辛い」と言う通り、地方のきらめく世界を押し上げるのも美術館の仕事であるはずで。

岩手という地方

高村光太郎は花巻独居生活時の講演で、「岩手県民の隠れた詩精神は不思議なくらい国際性、世界性を持っている事である。国際性といってもいわゆる出稼ぎの国際性ではなくて、精神における包容的世界性を意味する。外見上県民はひどく地方的でありながら、内面的にはその地方的なものに引つかかって居ない、いわば人類的な視野の大きさがあります。それ故、例えば新渡戸稲造とか石川啄木とか、宮沢賢治とかいうものに感ずる世界性が少しも不自然なく聞こえます。美術とか工芸とかいう、もともと世界的規模のもとにその地方的特性が発展せられてゆかねばならない性質のものに、岩手県が持つ運命は恐らく非常に大きいものだと思います」と述べています。また、彫刻家舟越保武はある対談で、日本の後進的地域のようでありながらどうして文化的な雰囲気があるのかとの質問に対し、経済的な事柄には集中できないが、文化的な活動には真面目に取り組む気風が何かしらあるのだと語っています。昔から、演劇や音楽会、展覧会などは満員になるという事例をもとに熱く語っています。

中央に馴らされることなく、強いグローバル的な思いを歴史や先人に学び、グローバルに対応できる身近な文化活動の拠点に美術館がなれないものかと思つて止まないのです。



岩手県立美術館
館長

藁谷 収